

## 2018年度秋季大会シンポジウム 「未来を拓く気象観測のあり方」の報告

### はじめに

早 坂 忠 裕\*

気象学は観測と理論、数値モデルが密接に関係して発展してきた。最近では計算機の進歩により、気候の将来予測や日々の天気予報の技術が大きく進みつつある。一方で、観測は気象学において必要不可欠であるにもかかわらず、今までその重要性が必ずしも十分評価されてきたとはいえない。気候の将来予測、天気予報、あるいは再解析の精度向上においても観測は極めて重要であり、特に最近では地球システムを統合的に理解する上で、多様な観測とそれによって得られたデータの有効活用が求められている。

気象観測に関連した最近の動向として、2017年7月に日本学術会議から提言「我が国の地球衛星観測のあり方について」が出され (<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t247-3.pdf>)、日本気象学会学術委員会においても第39期の評議員会の議論を踏まえて「地球観測の強化に向けて日本気象学会は何をなすべきか—地球観測のあり方について—」を取りまとめ、公表したところである(日本気象学会第39-40期学術委員会 2019)。

さらに、気象学は社会と密接に関係することや衛星観測等により大量のデータが得られることなどを踏まえ、気象観測の社会的意義、ビッグデータとしての活用方法など、より広い視点も含めて、気象観測のあり方を気象学会および関連分野の方々と一緒に考えてみたいと思い、2018年度秋季大会シンポジウム「未来を

拓く気象観測のあり方」を開催した。本シンポジウムは2018年10月30日に仙台国際センター大ホールで行われ、現在の気象学における観測の重要性の認識を新たにするとともに、衛星観測や航空機観測に関する計画策定、実現に向けた様々な課題、さらには今後ますます複雑化すると思われる気象学と社会との繋がりについて議論を深めることができた。

当日は早坂による趣旨説明の後、次の5名の方々に講演をしていただき、最後に総合討論を行った。

1. 学術委員会における議論の紹介  
塩谷雅人 (京大生圏研究所)
2. 地球衛星観測の現状と将来  
佐藤 薫 (東京大学大学院理学系研究科)
3. 衛星データ同化/再解析  
岡本幸三 (気象庁気象研究所)
4. 航空機観測や大気球による観測  
青木周司 (東北大学大学院理学研究科)
5. オープンサイエンス時代の観測データとその科学的・社会的役割  
村山泰啓 (情報通信研究機構)

お忙しい中、講演を引き受けていただいた講演者の方々ならびに当日参加していただいた皆様に改めて厚く御礼申し上げる次第である。

本解説記事は、ご講演の内容を後年に記録として残すため、当日の参加者に配布された予稿をもとにしつつ、あらためてまとめていただいたものである。なお、「2. 地球衛星観測の現状と将来」については、学術会議の提言ならびに「天気」上ですでに公表されている報告(佐藤ほか 2017)と内容が重複するため、ここでは割愛する。

\* 東北大学大学院理学研究科。

tadahiro.hayasaka.b4@tohoku.ac.jp

—2020年3月9日受領—

—2020年7月12日受理—

## 参 考 文 献

日本気象学会第39-40期学術委員会, 2019: 地球観測の強化  
に向けて日本気象学会は何をなすべきか—地球観測のあ  
り方について—, 天気, 66, 426-442.

佐藤 薫, 高薮 縁, 早坂忠裕, 2017: 日本学術会議提言  
「我が国の地球衛星観測のあり方について」, 天気, 64,  
747-751.

---

Discussions on the Ideal Situation of Meteorological Observations  
for Pioneering the Future  
(A Report on the Symposium of the 2018 Autumn Assembly  
of the Meteorological Society of Japan)

Tadahiro HAYASAKA\*

\* *Graduate School of Science, Tohoku University*  
*Email : tadahiro.hayasaka.b4@tohoku.ac.jp*

(Received 9 March 2020 ; Accepted 12 July 2020)

Contents

1. Masato SHIOTANI: Discussions at the Scientific Activities Committee of the Meteorological Society of Japan.
  2. Kozo OKAMOTO: Data Assimilation and Reanalysis Utilizing the Satellite Data.
  3. Shuji AOKI: Observations by Aircrafts and Balloons.
  4. Yasutaka MURAYAMA: Observational Data and its Scientific/Social Roles in the Open Science Era.
-